

# 奇異雑談集の成立

富士昭雄

## 序

『奇異雑談集』は、近世怪異小説の嚆矢として文学史的に意義深い作品であり、昭和三十年に吉田幸一氏により古典文庫・近世文芸資料『近世怪異小説』に翻刻された。また本作品に関する論文も少なくない。

ところで近年京都東寺宝菩提院三密蔵から『奇異雑談集』に関する一古写本が発見された。これは大正大学の東寺の蔵書調査の際見出されたものである。同大学助教授山田昭全氏は「東寺宝菩提院合宿回顧」(『大正大学学報』27号)として東寺所蔵の国文関係の珍しい古書数点を報告された。その中に、平安時代書写の『白氏文集』巻四の断簡等と並んで、『漢和希夷』という「奥書著者名を欠く江戸時代初期の写本」一冊があり、その一・二話の梗概が記されている。これは明らかに『奇異雑談集』所収の話であり、この旨を当時山田氏に伝えたところ、やがて翻刻されることであった。しかるにこのたび右『漢和希夷』の活用の御快諾を得たので、これを翻刻紹介し、この『漢和希夷』と『奇異雑談集』諸本との関係、また『奇

異雑談集』成立に関する問題等について考察したい。

## 一

『漢和希夷』は、後掲の翻刻解題にも記すごとく、十話から成り、これはほぼ『奇異雑談集』の後半部に相当する。主な話には、『剪燈新話』の「金鳳釵記」「牡丹燈記」の翻訳二話、『祖庭事苑』から訳出した干将莫耶の話がある。また文中に典拠を示していないが、本書第七話は、刊本『奇異雑談集』巻五の(一)「塩竈水焰の内より狐のばけるを見し事」に当たり、これは『法苑珠林』からの翻案と考える。

それは津の国塩屋で、冬の夜塩焼きの男が塩釜で火をくべていると、夜ふけに若い女が子を抱き火にあたりに来た。その内、男がかまどの下の炎を通して女の方を見ると、狐が雁を膝の上ののせてあたって居るのである。しかしかまどの上から見ると女である。男は腹を立て、火のおきをつきかけると、女は驚き狐の鳴き声を残して逃げて行った。後に雁を落してあったので、男は翌日市に売りに行く。途中で小男に呼び止められ、雁を二百文(刊本では五百文)に売り

帰宅するが、袋をあけると馬の骨であったという話である。

一方、『法苑珠林』卷四十二、感応縁「晋時有狸作人婦怪」は次の通りである。（『唐代叢書』所収の話は以下と少し字句の異同あり）

晋海西公時有一人母終家貧無以葬因移柩深山於其側志孝結墳晝夜不休將暮有一婦人抱兒來寄宿轉夜孝子作未竟婦人每求眠而於火邊睡乃是一狸抱一烏鷄孝子因打殺擲後坑中明日有男子來問細小昨行遇夜寄宿今爲何狂孝子云止有一狸卽已殺之男子曰君枉殺吾婦何得言狸狸今何狂因共至坑視狸已成婦人死狂坑中男子因縛孝子付官應償死孝子乃謂令曰此實妖魅但出獵犬則可知魅令因問獵事能別犬不答云性畏犬亦不別也因放犬便化爲老狸則射殺視之婦人已還成狸即ち、『法苑珠林』の方は、女が児を抱き火にあたりに来たが、実は狸で鶏を抱いていたことが露頭するという筋である。唐山種で先の狐の話と同巧異曲の内容であるので、これが先の『漢和希夷』の話の典拠となったものと考えられる。

このように『漢和希夷』は、その題名に明示するごとく、大半の話が中国文学の翻訳ないしは翻案に成ることは注目すべきである。

特に、本書第十話の干将莫耶の話では、『孝子伝』『医学源流』『玉海』を引用しており、著者の漢学の教養の深さをしのばせるものがある。吉田幸一氏の『奇異雑談集』の解題（注1）によると、『医学源流』は『剪燈新話』と同じ頃渡来したばかりの書籍で、後に元和七年版の古活字本等が出ている。また『玉海』『孝子伝』は既に平安時代に伝来しているが、吉田氏によると、現存の『孝子伝』の内、干将莫耶（その子盾間尺）の話の見えるものは、陽明文庫蔵本と京大蔵本のみであるという。そうすると、『漢和希夷』の作者は、新

渡来の『剪燈新話』を含めて、これら中国の書籍に触れ得た、漢学の造詣の深い人物であったようだ。しかも本書が東寺に現存することとは、本書の文辞に仏教臭の濃いものがあることと相まって、その作者は真言宗の好學にして文才のある僧侶であったと推測される。（注2）

『漢和希夷』は、後出の翻刻にみられるように、書き込みがあったり、漢文臭の濃い生硬な文体が挿まれている、きわめて草稿本的な特徴・体裁を帯びた写本である。

## 二

『奇異雑談集』刊本の諸本については、吉田幸一氏の解題（注3）に詳しいが、その後同氏により小汀利得氏所蔵の古写本が紹介された。（注4）また中村幸彦氏により島原の松平文庫所蔵の古写本が報告された。（注5）その上、前述の『漢和希夷』の他、未紹介の無窮会所蔵古写本もあるので、ここに『奇異雑談集』の写本・刊本諸本について改めて整理しておく。

学界未紹介の古写本に無窮会所蔵本がある。無窮会本は、同図書館平沼文庫所蔵。大本二冊の写本で、縦二十三・六糎、横十六・九糎、錦布地九曜地紋入表紙、金泥地見返し、本文烏の子紙、胡蝶装。題簽中央「奇異雑談集 上（下）」。内題「奇異雑談内少々卷上（下）」。上巻、墨付七十六丁、下巻、墨付七十二丁。漢字平仮名まじり文。振り仮名は片仮名表記である。

その外形（内題・外題・目録・丁移り・行移り等）及び内容（本文文辞・話柄・説話構成等）の上で、まったく後述の小汀利得氏所蔵本と同種の写本である。所収説話は、小汀本と同じく刊本に比べ

て五話多い。字形のくずし方に一・二相違はあるものの、無窮会本と小汀本とはきわめて酷似し、いわば姉妹の関係にあるといえる。両書の成立年代の前後は今にわかに定めがたい。しかし同種の古写本といえるので、本稿の次章では両書をしばらく「無窮会本」の称呼で用いることにする。

小汀利得氏所蔵古写本については吉田幸一氏の詳細な解題がある。<sup>(注6)</sup>今、諸本を考察する都合引用させていただくと次の通りである。

小汀利得氏蔵、写本「奇異雑談集」上下二帖、胡蝶装、竪七寸六分横四寸四分(23×16.3cm)、表紙本文とも鳥の子の共紙、題簽は「奇異雑談集上」「奇異雑談下」<sup>(マヤ)</sup>とあり、内題は「奇異雑談内少々巻上」「奇異雑談内少々巻下」とある。上巻は四折八十二丁、墨付七十四丁、下巻は四折八十丁、墨付七十二丁より成る。

小汀本には柳亭種彦の識語、黒川真頼等の蔵書印がある。吉田氏は次のように述べている。

本書は種彦旧蔵本であつたこと、種彦が既に板本と比較してその異同や五話の多いことに気がついてゐたことが知られるが、種彦が本書の書写年代を天正頃と見たのはやゝ溯つて見過ぎて居り、書体から見て本文は明暦寛文頃と見るべきであらう。

小汀本については右の吉田氏の解説に従うべきである。

他に松平文庫所蔵古写本がある。これは長崎県島原市公民館松平文庫所蔵。縹色行成表紙の写本、大本二冊、縦二十七・四糎、横二

十・一糎。題簽左肩「奇異雑談集上(下)」<sup>(マヤ)</sup>。内題「奇異雑談内少々巻上(下)」。<sup>(マヤ)</sup>漢字平仮名まじり文、振り仮名及び句読点まったくなし。島原初代藩主松平忠房の蔵書印あり。貞享・元禄筆写の写本と推定される。

松平文庫本は、小汀本・無窮会本と同系の写本で、やはり刊本より五話多い。本文に振り仮名表記がないので、刊本の底本には用いられなかったものと思われる。

以上の無窮会本・小汀本・松平文庫本は、刊本に比べて所収説話は五話多いので、これらを広本といってよい。また東寺本『漢和希夷』は、『奇異雑談集』のほぼ後半部に当たる草稿本的な写本なので、いわば『奇異雑談集』の異本ともいえよう。

### 三

東寺本『漢和希夷』と、『奇異雑談集』の古写本(無窮会本・小汀本・松平文庫)や刊本との関係について考察してみる。便宜的に古写本は無窮会本で代表させ、その関係を図示すれば左の通りである。

東寺所蔵古写本『漢和希夷』

(一) (東寺本・第九話) 原話「牡丹燈記」

○Y鬢ノ童女一人雙頭ノ牡丹燈ヲ肩ニ挑ケテ前ヘ行ク後ニ窈窕タル美女一人從西ノ方ニ靜ニ過行ケリ

(原話) 見一Y鬢挑雙頭牡丹燈前導。一美人隨後。

○喬生ハ差凭テ……美女諾氣色アリ

(原話) 生郎趨前揖之……女無難意

○女ノ手ヲ……引入レY鬢ノ童女ハ端ノ間ニ居シ美女ヲ中堂ニ請シ入レケレハ不計ノ佳遇ト云ナリ帳ヲ垂レ薰ヲ施シ雙枕合歡甚タ極ム世ニ无レ比之多情也

(原話) 生與女携手至家。極其歡昵。自以爲巫山洛浦之遇。不是過也。

○……新枕不可忘ニ重テ忍ヒ來ラントテ鷄鳴ニ臨テ出去リヌ其ヨリ夜々ニ來テ朝々ニ去ル事半月ニ及フ

(原話) 天明辭別而去。及暮則又至。如是者將半月。

○粉粧タル鬻骸

(原話) 一粉粧鬻骸

無窮会所蔵古写本『奇異雜談』

(卷下・第十四話・目錄に章題不載分)

○Y鬢の童女一人ありて雙頭の牡丹燈をかたにかゝけてさきにゆけば後に窈窕たる美女一人したがつて西にゆく

○喬生よろこんでさしよりて……女すなはちうけがふ

○女の手をとりて我家に引て入り金蓮をばはしのまに居せしめ女を中堂に請じいるゝ也はからざるの佳遇とて帳をたれ枕をならべはなはだ歡悦をきはむ世にたぐひなき多情なり

○こよひのにるまくらわするべからず鳥なき天あくるといふて出さるなり喬生ゆめのさめたるがごとくにして人とかたる事なくよろこびたのしめり夜にいたりて美女またきたるこれより夜々にきたり朝々にきたることまさに半月ならんとす

○粉をぬりよそほひしたる鬻骸の女一人

貞享四年刊本『奇異雜談集』

(卷六・一)「女人死後男を棺の内へ引込こるす事」

○Y鬢の童女一人ありて雙頭の牡丹燈をかたにかゝげて。さきにゆけば後に窈窕たる美女一人したがつて。西にゆく。

○喬生よろこんで。さしよりて……女すなはちうけがふ。

○女の手をとりて。我家に引て入り。金蓮をばはしのまに居せしめ。女を中堂に請じいるゝなり。はからざる佳遇とて。帳をたれ枕をならべ。はなはだ歡悦をきはむ。世にたぐひなき多情なり。

○こよひのにるまくらわするべからず。鳥なき天あくるといふて。出さるなり。喬正ゆめのさめたるごとくして。人とかたる事なく。よろこびたのしめり。夜にいたりて美女またきたる。これより夜々にきたり。朝々にきたること。まさに半月ならんとす。

\* (古典文庫本「さ」)と誤刻)

○粉をぬりよそほひしたる。鬻骸の女一人。

○麗卿之柩トアリ前ニ雙頭ノ牡丹燈ヲ掛下  
タニ一リノY鬢ノ童女ヲ立タリ  
(原話)麗卿之柩。柩前懸一雙頭牡丹燈。  
燈下立一明器婢子。

○麗卿の柩と云々前に雙頭の牡丹燈をかけ下  
に一のY鬢の童女を立たり

○麗卿の柩と云々。前に雙頭の牡丹燈をか  
け。下に一のY鬢の童女を立たり。

(二) (東寺本・第五話)

○此人平生行儀 恭 謙 而不 飾窮困而不  
諂 妄 不 談笑 顏自和順(1) (飲酒 謬不  
犯多施不 貧) (2) (出 無 褻晴 行 無 扈  
從) (3) (請用 嫌 結構) (4) (草庵 掃 奇  
麗也 勤行 無 懈怠 念佛 无 休時)

(卷下・第六話)

「四條のぼうもん烏丸 西光庵の事」  
○此人平生の行儀実容なり 恭 謙 しておごら  
す 窮困にしてへつらはずみだりなることを  
かたらす 笑頭をのすから和順す(4) (草庵を  
きれいはき 佛檀をしゆせうにかざる 勤行  
けだいなく 念佛やすむときなし) (3) (請用  
にけつかうをきらひ) (1) (酒を一滴ものま  
ず 嚙金おほくむさぼらず) (2) (出るに褻晴なく 行に扈從なし)

(卷四・六)

「四條の西光庵五三昧を廻りし  
事」  
○此人平生の行儀實容なり。 恭 謙 しておご  
らず。 窮困にしてへつらはず。 みだりなる  
ことをかたらす。 笑顔をのづから和順す。  
草庵をきれいはき。 仏檀をしゆせうにか  
ざる。 勤行けだいなく。 念仏やすむときな  
し。 請用にけつかうをきらひ。 酒を一滴も  
のま。 嚙金をおほくむさぼらず。 月忌日  
をかへす。 出るに褻晴なく。 行に扈從な  
し。

(三) (東寺本・第一話)

天正二年ノ事  
一 越後ノ國上田ノ庄ニ雲東庵ト言寺ノ長  
老檀那ニ庄内ナル人死ス引導……  
○導師ノ氣分強精ノ驗シヤ  
○彼師雅意ニ任 只不 苦 勸 事ナリト云々

(卷下・第一話)

「越後上田の庄にて葬の時  
雲雷きたりて死人をとる事」  
一 ある人かたりていはく ちぢの國上田の  
庄に寺あり 雲東庵とかうすその 檀那庄内  
の人死すその長老いんだうをなす  
○長老のきぶん強精なり  
○長老雅意にてくるしからした、葬をせよと  
いはれてかくのごとく也

(卷四・一)

「越後上田の庄にて葬の時雲雷  
きたりて死人をとる事」  
○ある人かたりていはく。 ちぢの國上田の  
庄に寺あり。 雲東庵とかうす。 その檀那庄  
内の人死す。 その長老いんだうをなす。  
○長老のきぶん強精なり。  
○長老雅意にて苦しからじ。 たゞ葬をせよと  
いはれかくのごとく也

(四) 東寺本・第四話

一 東山靈山正法寺ノ開山國阿上人ハ晩出家也

○ (話の結び) 奇特多キ事縁起ニ具ニ有之

(巻下・第五話 ただし目録では「四」、

「姑獲の事」)  
一 因チナミにクく靈山正法寺リヤウセンシヤウボウジの開山國阿上人カイサンコクア シヤウニンは晩出家バンシユツケなり

○ きどくおほき事縁起チニギにつまびらか也

右内婦ヤイフド士葬ドサウいけの事姑獲チナミとおなじきゆへにこゝにシするスもシ毎日三錢マイニほとこす事これなくは姑獲チナミとなるべきものなり

(巻四・四) 國阿上人發心由來の事

○ 靈山正法寺の開山。國阿上人は晩出家なり。

○ きどくおほき事。縁起につまびらかなり

右内婦士葬以下の事姑獲とおなじきゆへにこゝにシするスもシ毎日三錢ほとこす事これなくば。姑獲となるべきものなり

さて右の表(一)で三者を比較すると――

東寺本は、原話「牡丹燈記」の「Y鬢」を「Y鬢ノ童女一人」

と訳出しているが、この部分は無窮会本には「Y鬢の童女一人」と

あり、刊本では「Y鬢の童女一人」となっている。また東寺本は原

話の「粉粧髑髏」を「粉粧タル髑髏」と訳しているが、無窮

会本には「粉をぬりよそほひしたる髑髏の女一人」とあり、刊本で

は「粉をぬりよそほひしたる髑髏の女一人」となっている。このよ

うにみえてくると、東寺本・無窮会本・刊本の三者がきわめて密接な

交渉のあることが指摘できる。

さらに顕著な例では、東寺本には原話にない表現を補って訳出している条がある。例えば表の(一)では、「Y鬢ノ童女ハ端ノ間ニ居シ美女ヲ中堂ニ請シ入レケレバ不計ノ佳遇ト云ナリ……」の条がそれ

で、無窮会本では「不計ノ佳遇」を「はからざるの佳遇」と改めて

いるほか、東寺本と同じ叙述がなされている。また刊本は無窮会本

の叙述をそのまま踏襲している。このように三者は同系統の内容を

もち、一方から他方に書写伝承されたものと考えられ、それは表で

は上段から下段への方向であったといえる。

次に右の表(二)でみると――

東寺本は漢文体で叙述がなされているが、無窮会本ではこれをほ

ゞ踏襲し平仮名まじりの文に改めている。即ち、表(二)で指示したご

とく、(1)(2)(3)(4)の叙述の順が、無窮会本では(4)(3)(1)(2)と叙述が替

てはいるものゝ、全文の語彙・文辞の上では東寺本に準拠している

ことがわかる。また刊本は無窮会本の片仮名による振り仮名表記を

平仮名に改めたほかおゝむね同文である。このように右の表(二)でみ

れば、無窮会本あるいは刊本のごとき平仮名まじり文から、東寺本

のごとき漢文体が書写・成立したとはとうてい考えられない。

さらにまた東寺本が古態を存している証左として次のような例も

ある。東寺本では説話の背景の年代をかなり精しく述べているが、無窮会本ではこれを略したり、臚化しており、説話をより文学化しようとする傾向が認められる。例えば、右表の(目)のように、東寺本は冒頭部に「天文二年ノ事」と傍書して始まるのに対し、無窮会本はそれを削り、代りに「ある人かたりていはく」という語句を巻頭に挿入している。なおこれが刊本にも同じく継承される。また右表には掲出しなかったが、東寺本第三話は、冒頭に「天文六年ノ事ナルニ」と傍書するが、無窮会本では冒頭には「ある人かたりていはく」を挿入し、少し後文で事件の背景を「天文五六年のころほひ」とやや臚化して説明している。

## 四

『奇異雑談集』の刊本は、天理図書館所蔵貞享四年刊本が刊記・挿絵等を具備した現存唯一の善本である。天理本と他の無刊記の刊本とを比べると、巻一の四「古堂の天井に女を磔はっけにかけをく事」の本文挿絵で、天理本では磔の絵があるのに対し、無刊記本には磔の部分削除している。たゞし、天理本には序文はない。なお古典文庫本は、吉田幸一氏所蔵の無刊記本を底本にしているので、巻一の四の挿絵には磔の部分が削られている。鈴木重三氏の御示教によると、『和漢三才図会』の場合など、正徳から享保頃にかけて幕府の制禁によってか磔等の挿絵を削除するようになる例があるとのことである。その点先に吉田幸一氏が『奇異雑談集』の解題(注7)で、無刊記本の内、「巻末に広告不載」の方は宝永から享保初め頃刊行か、「巻末に広告掲載」する方は享保末から元文初め頃出版かと述べら

れた推定は、ほぼ正しいことがわかる。

さて無窮会本等の古写本と刊本との説話流用・踏襲(注8)の関係は、既に小汀本に関して吉田幸一氏が指摘されたところと同じである。即ち、刊本は古写本に比べて所収説話は五話少ない。その説話撰取の状況は次の通りである。

(写本)

(刊本)

上巻(第一～五、七章) ↓ 巻一(六話)  
 上巻(第八～十、十二～十五章) ↓ 巻二(七話)  
 上巻(第十六～十九、二十一章) ↓ 巻三(五話)  
 下巻(第一～九章) ↓ 巻四(九話)  
 下巻(第十～十三章) ↓ 巻五(四話)  
 下巻(第十四、十五、十八章) ↓ 巻六(三話)

このように説話の構成、順序を比較すると、刊本は古写本をかなり忠実に継承していることがわかる。古写本から刊本に採録されなかった五話(上巻の第六・十一・二十章、下巻の第十六・十七章)は、その内容が他の章の話と類話であったり、単なる語源を説く話であったりするので、刊本の編者(序文によれば板行者)が割愛したのらしい。そうして刊本の直接の底本となったのは、小汀本ないしは無窮会本であったといえる。

以上の諸本の間係を图示すると次のようになる。

(写本)



刊本

貞享四年刊本

無刊記本(巻末に広告不載)

無刊記本(巻末に広告掲載)

五

『奇異雑談集』の成立年代については、早くから漠然と室町時代末期とみられていたが、昭和三十年に目加田さくを氏は天文末年成立を説き、<sup>(注9)</sup>同年吉田幸一氏は板本の内部徴証から天文十五年から二十年頃までの成立と推定された。<sup>(注10)</sup>ところが昭和三十二年長沢規矩也氏は、本書の成立は近世に入ってからではなからうかと反論された。<sup>(注11)</sup>次いで昭和三十四年吉田幸一氏は小汀本を紹介し、これを底本として板本が出たものと説くが、小汀本の書写年代を明暦・寛文頃と推定している。<sup>(注12)</sup>また昭和三十七年中村幸彦氏は、長沢氏の近世初期成立説の妥当な旨を述べ、従来の天文年間成立説との新旧二説の折衷説を出された。<sup>(注13)</sup>それは『奇異雑談集』の大部分はや、前に成立し、最後の『剪燈新話』に拠る話は、別人が『剪燈新話句解』が新渡した後に付け加えたのではなからうかというのである。その別人は松平文庫に写本の伝わった点からみても早くこの句解本を入手し得た林羅山かその周辺の人ではなかったかという。さらに同年のと太刀川清氏は、別途から本書の近世初期成立を説いた。<sup>(注14)</sup>本書巻四の四「産女の由来の事」に『本章綱目』を引用している点を指摘し

『本草綱目』が渡米し流布する期間などを考慮に入れると、天文年間成立とは考えられないという。また長沢氏が後人の仮託かと疑問視された、<sup>(注15)</sup>本書巻二の田中の「予が父中村豊前守云々」という作者の出自を示す条が、そのまゝ、『近江国輿地志略』<sup>(享保十九年成立)</sup>所引の「佐々木家記」と同文であり、「佐々木家記」の伝存は不明であるが、この書の成立後参考にしたものかとも述べている。

以上のように『奇異雑談集』の成立年代は、最近では近世初期という考え方が強く出ている。

またその作者については、刊本の序文及び本文(巻二の四)から江州佐々木屋形幕下中村豊前守の子息と判明するが、定かでない。

目加田さくを氏は、仏教語の多用から僧侶とされたし、<sup>(注16)</sup>長沢規矩也氏は、中村豊前守の子息とするのに疑問視された。<sup>(注17)</sup>中村幸彦氏は、

林羅山かその周辺の人の手に加わった可能性もあり、作者は二人以上で、本書が編著としての性格のあることを指摘されている。

本書の成立について、太刀川清氏は本書(刊本)の説話を次のごとき四系列に分けて考察する。<sup>(注18)</sup>(一)作者中村某関係の話で、文明年とか話の年代も明らかで、江州や越中の話に限られる。(十話)

(二)「ある人かたりていはく」で始まり、事件の年代は不明で、越後や下総など京より遠隔の地の説話。(十話) (三) (一)及び(二)系列に入らない本朝譚で、京を中心とする話が多い。(十三話) (四) 唐土譚の翻訳。(五話) そうして、第一の系列は近世初期本書成立の際他から流用したもので、文中の一人称の表現は必ずしも作者その人とするのではないとする。第二・三の系列は、作者の直接の見聞





## 結び

東寺本『漢和希夷』の出現、また無窮会本の存在で、『奇異雜談集』の成立に関して様々な問題が出て来た。先ず東寺本が『奇異雜談集』後半部の草稿本的性格の書であることが判明した。従って『漢和希夷』は『剪燈新話』の本邦初訳という記念すべき書でもある。訳出の上での特殊な訓みや原文にない叙述が、そのまま、無窮会本等に影響していることは、『奇異雜談集』の作者及びその環境等に関してきわめて暗示的である。少なくとも『漢和希夷』は東寺関係の僧侶の手に成るものといつてよい。その成立年代は未詳であるが、「新渡二」あるので『剪燈新話』の渡来後間もない頃であろう。

無窮会本は、小汀本とまったく同種の書で、にわかにな書成立の前後を定めがたい。この両書系統の本を底本とし、話柄の重複する五話を削って出たのが刊本である。

広本『奇異雜談集』の作者は、東寺本のごとき草稿本を二つ以上下敷きにして、現存の写本のごとき体裁にまとめ、また新しい注記を添加して作品として完成させたものと思われる。無窮会本は浄書本のごとき立派な写本である。『奇異雜談集』の東寺本に拠らない部分に、説話者の友人として「宝幢院の宗珍」「大徳寺の正首座」「常楽寺の栖安軒琳公」「靈雲」「午松齋宗珠」等の名が載っているのは、説話者——作者の身分をうかがわせるものがある。いわば編述、編著者ともいえる『奇異雜談集』の作者は、『漢和希夷』の行われた範囲を考慮に入れると、新渡の漢籍にも触れ得た、京都東寺所縁の僧侶であろうと考えられる。

本稿は、昭和四十六年度秋季日本近世文学会で、「奇異雜談集成立の問題」として口頭発表したものを補正したものである。末文ではあるが、東寺本に関して御高配下さった山田昭全氏、小汀利得氏・無窮会等に御紹介御教示下さった山岸徳平、市古貞次、鈴木重三、中村璋八の各先生方に記して深謝の意を表する次第である。

(注1) 吉田幸一氏編『近世怪異小説』(古典文庫刊・近世文芸資料3)。

(注2) この点に関しては、目加田さくを氏「奇異雜談集の語彙について」『文芸と思想』昭30・7月)が参考になる。

(注3) (注1) 参照。

(注4) 吉田幸一氏「『奇異雜談集』の古写本に見える新説話」(『言語と文芸』昭34・3月)。

(注5) (注4) 参照。

(注6) 中村幸彦氏他二氏「肥前島原松平文庫」(『文学』昭37・1月) 八六ページ。

(注7) (注1) 参照。

(注8) (注4) 参照。

(注9) (注2) 参照。

(注10) (注1) 参照。

(注11) 長沢規矩也氏「怪談全書・奇異雜談集についての疑問」(『愛知大学文学論叢』昭和32・3月)。

(注12) (注4) 参照。

(注13) (注6) 参照。

(注14) 太刀川清氏「奇異雜談集成立考」(信州大学『かりばね』創刊号 昭和37・2月)。

(注15) (注11) 参照。

(注16) (注2) 参照。

(注17) (注11) 参照。

(注18) (注14) 参照。

(注19) 沢田瑞穂氏「剪燈新話の舶載年代」(『中国文学月報』第35号、昭和13・2月)。

(文学部助教授)

(29頁よりつづく)

(7) 天野雨山氏(水の音・昭一四・一) 大磯義雄氏(国語と国文学・昭二二・九)

(8) 別号豚庵又は木蛇。従って江西竜派の編纂は新編集でなく、新選集であろう。蟬閣慕喆両兄弟は未詳。竜派は天授元年(一守三七五)生れ、文安三年(一四四六)八月没。七十二歳。総州太守千葉氏の子、建仁寺祥庵一鱗に帥事、のちこれを継ぎ更に南禅寺にも住し、晩年建仁寺統翠軒に隱栖。著統翠詩集。木蛇集。

(9) 建仁寺詩僧。号黙雲、諱は竜沢。

(10) 陳師道、后山居士と号す。徐州の人「読后山詩大似参曹洞禅」(后山詩集序)

(11) 仏頂禅師は六朝傳大士の心王名で開悟。(仏頂和尚行状記) 自作正信銘(連歌俳諧研究・二五号・岡部長章氏)

(12) 金陵の人、姓は朱氏。道林寺で禅を修む。予言をいい過ぎ、梁の武帝に追われ、建康の獄に投ず。のち高祖禁を解く。九十七。広濟大師、妙覺大師、真密禅師と諡号。

(13) 韶山に住す。夾山善会禅師の法嗣。生没不明、無畏禅師と諡号。

(14) 丹霞山に住す。芙蓉道楷禅師の法嗣。俗姓賈氏。寿不詳。

(15) 同時即は「光来れば暗去る」の如く、異時即は「十善を修すれば天に生ず」の如きをいう。

(文学部講師)